HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	著者に聞く ： 櫻井義秀氏
Author(s)	櫻井, 義秀; 井手, 直人; 上村, 岳生 他
Citation	国際宗教研究所ニュースレター, 58, 17-22
Issue Date	2008-04-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35593
Type	article
File Information	sakurai-7.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

著者に聞く
『東北タイの開発僧:宗教と社会貢献』
北海道大学大学院教授
櫻 井　義 秀 氏

今回は、本年 2 月に『東北タイの開発僧：宗教と社会貢献』（梓出版社）を上梓した櫻井義秀氏（北海道大学大学院文学研究科教授）にお話を伺った。社会学の立場からアプローチした本書は、「宗教と社会貢献」というテーマに対して、新しい視角を提示している。
（聞き手：井手直人・上村岳生・小川有閑）

本書執筆の動機

――前著[1]につづいて、東北タイの開発をテーマにした本を出版されたわけですが、本書ではどのような面が展開されているのでしょうか。

櫻井：前著は東北タイの総論で、東北タイにおいて、どのような社会変動と文化変容が起きているのかを描きました。社会学の立場から地域社会の変動を描くというのがテーマで、宗教については、村落の社会変動と、それに伴う村人の宗教実践の変化ということしか扱っていませんでした。

そこで今回は、以前から扱いたかった、上座仏教の現代的な変化や地域に根ざした村と僧侶の宗教的な営みを、「東北タイの開発僧」という特定のテーマで描き出そうとしたのです。

それと同時に、数年前に「宗教と社会」学会で「宗教と社会貢献」というテーマセッションに関わったことがあって、このテーマについて、「東北タイの開発僧」という問題を拡大して議論できないかと考えて、この本を書きました。

――東北タイという地域へ関心をもったきっかけは何だったのでしょう。

櫻井：もともと NPO や NGO の活動に関心があって、大学院生の頃に、東北タイの中学生に奨学金を送る NPO のメンバーだったのです。その時、送ったお金がどのように使われているのかということを知ろうと思って、自分で現地に行ってみたのが東北タイを訪れた最初です。その縁で、その後少しずつ現地に通って調査するようになりました。そこで、寺院と僧侶が地域社会に対して果たしている役割が非常に大きいということを感じた。社会の進むべき方向性がはっきりしなくなったようなときに、宗教者がガイド役を果たしているということに、或る種の感動を覚えたのです。

日本の場合は、寺の檀家になるとか神社の氏子になるとか、あるいはどこかの新宗教のメンバーになるなど、メンバーシップを何らかの明確なかたちで得ないと、宗教者と関わりにくいというところがありますが、タイの場合は、村に住んでいるというだけで、その

[1] 『東北タイの開発と文化再編』北海道大学図書刊行会、2005 年。

村の寺院と関わりができます。何か精神的な問題があれば寺に行って相談を受けられるし、年中行事を行う際も、寺に行って様々なサービスを受けられます。或る意味で非常に安定している。日本では、何か問題が起こったときに、何処へ行けばいいか探して選ばなくてはなりませんが、タイではその必要がない。

宗教と社会の関わりが非常に密接です。そんなところから、タイの上座仏教が、地域社会のなかでどのような役割を果たしているのかということに関心を持つようになったのです。しかし、同時に、そのような伝統的な宗教実践も変化してきているわけです。そこで、寺院や僧侶の営みの変化を、社会史というもののなかで捉え直してみたかったのです。

近代化のなかのタイ社会

――先生がタイに関わった時期の、開発の状況はどうだったのでしょう。

櫻井：私が行き始めたのは 80 年代の後半からでしたが、その時は、開発は一段落したところでした。国が主導的に開発事業を行っていたのは 70 年代から 80 年代の前半で、85 年以降は、タイがかなり経済成長を遂げるようになってきて、内需も拡大し、いわば自転しはじめるようになってきた。開発という経済的な営み自体は一段落したのですが、60 年代 70 年代に言い聞かせられてきた開発というイデオロギーが身体化しているところがあります。それがまだ残っていて、僧侶や地域で活動する人たちは、発想がかならず開発ということになってしまうところがある。

また一方で、開発ということと関係づけないで何らかの組織的活動をしようとすると、共産党ではないかと疑われるという背景があります。中国共産党の指導下にあったタイ共産党は、政府により禁止され壊滅状態にあったのですが、東北タイは共産党の拠点があったという経緯があるので、政府の言説に乗らないで社会活動を行うということは、弾圧の対象になってしまうのです。

――タイ社会は近代化の流れのなかで、どのような位置にあるのでしょうか。

櫻井：タイ社会のなかには、プレモダンもポストモダンも両方あります。例えば、日本にはミドルクラスの人たちもいれば、ワーキングプアと呼ばれる人たちやホームレスもいる。こうした状況には、ポストモダン的なグローバル化した経済の影響という面が比較的はっきりと出ていますが、タイの場合には、モダンに移行できなかった人たちもいるのです。

国境沿いには、近代的な国民国家に組み込まれないままに、無国籍的に暮らしている人々がいる。一方、国家に組み込まれて、タイ国民となって国家の恩恵を受ける人々もいる。また、近頃では、グローバル化のなかで家族が崩壊し、ストリートチルドレンになっている人たちも増えてきている。逆に、巨大なショッピングモールのようなものもできて、そこで買い物を楽しむ人々もいる。非常に様々で、タイ人自身が、自分たちの世界が今どのような状態にあるのか、どうしていったらよいのかということが、恐らくわかっていないのだと思います。

タンマカーイ[2]なんかが伸びてきた理由には、こうした混乱した状況のなかで、このままではいけないということから社会に仏教的な秩序をもちこんで、若い人たちに、或る種の統制された生活のパターンを教えていったというところもあるのだと思います。あるいはまた、近代化の爛熟した部分から距離を保とうとした人々のなかから、サンティ・アソーク[3]という禁欲的なグループが形成されたりする。こうした状況のなかで、人々の声に応えて個々の僧侶が活動しているということはありますが、タイの仏教の本流であるところのサンガが、宗教的なニーズに上手く応えているかというと、どうもそうではないように思えます。タイの社会もそうですが、タイの仏教も非常に多様で複雑ですので、タイ仏教全体をもってエンゲイジド・ブッディズムだということではないのです。

――タイの人たちの信仰心についてはいかがでしょうか。

櫻井：タイの人々にとっての仏教は、実態としては、信仰するしないというものではなく、生活様式といった方がいいと思います。日本人は日本の生活様式があるし、タイ人はタイの生活様式がある。タイの仏教は、その生活様式のなかに組み込まれているから、信仰するとかしないとかいった感覚ではないように思います。日本人が初詣や墓参りに行くのと一緒です。

宗教には、むしろそのような側面が大きいと思います。宗教というと、まとまった信念体系、儀礼体系、組織などがあって、それが統一されたものを考えがちです。これは教団宗教にはあてはまりますが、そうではない宗教もたくさんあるわけです。日本人の場合は、宣教師がもち込んだ西洋的な宗教概念を受容したために、いわば真の宗教とは違うものとして、民衆宗教とか民俗宗教を捉えるようになった、宗教というものを狭い概念で捉えるようになったというところがある。さらに、太平洋戦争で挫折し、国家神道のこともあって、宗教的な面での日本人らしさというものを、非常にネガティブにしか表現できないところがあります。タイ人にはそういうところがまったくなく、仏教を基盤にしながら、それが生活様式全体にしみわたっているので、或る意味で、非常に安定しています。

本書の手法的特色

――本書のテーマとして、方法論についての議論が一つの大きな柱になっているように思われますが。

櫻井：本書のポイントは、まさにその方法論、つまり調査法や分析法にあります。従来は、典型的な開発僧と考えられているところへ調査に行って、僧侶が開発のキーパーソンになっているということを明らかにするというものが多かった。しかし、一方では、事例というのはそれが置かれているコンテキストを明らかにしないとわからないという側面があります。

---

[2] 独特の瞑想法による個人の覚醒を重視する都市型の新宗教。エリート階層に多くの信者を持つ。タイ仏教サンガとも親密な関係をもち、社会活動にも積極的に関わっている。

[3] 農村コミューンを拠点として自給自足の生活を営む宗教教団。低社会層に多くの信者をもつ。世俗と離れたコミューン内での禁欲的生活を実践し、サンガからも独立して活動している。

本書に書いたことですが、例えば、日本で非常に積極的に社会活動にコミットしている仏教団体に創価学会がありますが、それのみを取り上げて、日本のエンゲイジド・ブッディズムはこうだと結論付けてしまうと、議論が極端になると思います。もっと広く、様々な宗派の事例を取り上げることによって、創価学会の活動の特徴も見えてくるのです。

社会学の基本的な発想に比較ということがあります。一つの事例の特徴を描き出すためには、様々な事例をできるだけ集めて、ヴァリエーションの幅を出す必要がある。そこで問題は、どこまでその範囲を広げるのかということになるのですが、それが事例研究において、非常に難しいところになります。

本書で扱った東北タイの開発僧ということでは、事例が三十を越えたあたりで大体ヴァリエーションがそろったかなと思いました。ただし、これらの事例は、あくまで開発活動に非常にコミットしている僧の事例なわけです。そこで、それ以外の僧侶はどうなのかということも同時に考えなくてはならない。これについては、一つの郡の寺院を全て調査することで、一般的な僧侶の事例を集めました。それに先行研究の開発僧の事例を加えて、三つのデータがそろった。この三つのデータを比較することで、何故このデータのヴァリエーションが違うのかということを、地域的な変差の問題と時代的なスパンの中で考えていくという方法をとりました。これが、私が考える、社会学的な事例研究というものです。

このような社会学的な方法論で、東北タイの宗教現象あるいは社会というものを扱った研究はこれまでありませんでした。だから、方法論のところまで注目してもらえたらいちばん嬉しいし、そこに自分の独自性があると考えています。

――本書では、いわゆる常識的な考察のやり方、つまり、東北タイの開発僧の考察ということであれば、その枠組みを出発点にするということは、視野を狭くしてしまいかねない、宗教という枠組みもまだ狭い。そこでタイの歴史や社会といった、より包括的な視野から、東北タイの開発僧という具体的な対象へとアプローチしていこうとされていますね。

櫻井：研究をしていくうえで、やはり先行研究を何らかのかたちで乗り越えるということが必要になります。それには、いくつかのやり方がある。先ず、理論的に乗り越えるというもの。これは、理論研究や学説史研究にあてはまりやすいが、実証型の研究には非常に難しい。実証型の研究では、調査の方法論と知見の出し方で先行研究を乗り越えるということになる。本書でやっていることは、方法論としては実は目新しいものではありません。例えば、事例の比較ということは、すでにウェーバーが、世界の諸宗教の類型を立てて、宗教的な活動とそれを支えるエートスを描くということをやっている。しかし、日本では、そうした方法論に基づいて、実際に事例研究をするということが、これまであまりなされてきませんでした。

――エンゲイジド・ブッディズムというテーマは、研究者のみならず宗教者からも最近注目を集めているように思われます。これまでは、理想的な事例を提示して、エンゲイジド・ブッディズムをいわばモデル化するというところがあったように思いますが、本書では、社会的、政治的コンテキストに位置付けて客観的に描きだすことで、新しい視点が提供さ

れているという印象をもちました。

櫻井：運動の当事者は、様々な状況の中で実践していかなければなりません。研究者は、その流れに乗りつつも、そこから一歩身を引いて、その流れの行方を客観的に見るというところがなければならない。そのためには、事例についての知識と研究の視点というものが大事になります。

――そうした立場は、本書のなかで書かれていた、宗教と社会貢献というテーマを考える素材となる事例を蓄積することの重要性とも関係してくるのですね。

櫻井：理論的に全く新しい地平を切り開いていくというタイプの研究ももちろんあるけれども、私はそのようなタイプの研究者ではありません。自分で一次資料を集めながら、後の人が使えるような資料性があるものをつくるというのが自分の立場であり、自分の研究の意義であると考えています。この本の三分の一が詳細な資料集となっているのも、そのような理由があるのです。

例えば、このテーマに関心をもった若い研究者が、10 年後に本書で事例を採取した寺院に訪れたとしたら、おそらくその時は、もう開発事業はやっていないと思います。そうした時に、開発実践は僧個人によって内発的に始められたものなのか、歴史的・社会的状況の中で行われたものなのか、あるいはまた、どういう要因があるとそれが頓挫するのかといったことも、本書に載せたような資料があれば、後の人間が自分で調べることができます。

ある一時点の調査は、時間的な流れをみることができないから、複数の時点で調査しなければならない。しかし、個人が出来ることは限られています。その場合、後の人が利用できるようなかたちで資料を残すということは非常に大事なことになります。従来の調査研究では、データの解釈については多くの蓄積があるが、データそのものを残しているものは、実はあまりない。しかし、それでは、どういうデータに基づいてその解釈がでたのかという筋道が、後の人間は捉えきれないというところがあります。そこに誤読や深読みといったことが生じる危険性が生じる。また、前のデータとの比較対照が出来ませんので、学問的に発展しにくい。

資料性を重視しているのは、或る一つの学問をやっていく中で、自分の研究が一つのステップになると考えるからです。後の人は、私の研究を一つのステップにして、研究を積み重ねてほしいと思っています。

宗教と社会貢献への視座

――タイの歴史や社会といった全体的な視野のなかで、宗教の社会貢献というテーマを扱っている本書では、歴史的・社会的状況が、結果として宗教に社会貢献という役目を担わせてきたという面が描かれていますが、そこでは、宗教の社会貢献活動と NPO など非宗教的な団体のそれとの違いがわかりづらくなるという面があるような気もしますが。

櫻井：社会貢献というものの発想自体が、それは社会によって評価されるべきことである

ということを含んでいます。社会的な要請があるにせよ、宗教は教義的な発想に基づいて活動をするわけです。しかし、それが社会にどのような影響を与えたのかという評価は、社会の側でするものなのです。ですから、社会貢献という発想をしたとたんに、軸足は社会の側にあるのです。私は、このテーマはそれでいいのじゃないかと思っている。

その社会活動を担っているのが宗教であっても政治であっても、実践しているのは現場にいる住人たちです。彼らは利用可能な様々なリソースを使いながらやっているわけであって、宗教とか政治とかいったものは、現実的にはあまり分裂してはいません。

――宗教の社会的機能というのは社会学のなかでも古典的なテーマですが、「宗教と社会貢献」というタイトル、テーマにしたのは、何か理由があるのでしょうか。

櫻井：貢献という機能はポジティブな機能です。宗教の社会的な役割や機能と言うとネガティブな側面も含んできます。勿論そういう側面も明らかにしていかなくてはなりませんが、本書では、ポジティブな機能が現れるとしたら、それはどのような社会的条件の下においてなのかということを特に描きたかったのです。

――本書で扱われている南タイにおける暴力の問題は、ネガティブな側面の例ということなのですね。

櫻井：そうですね。上座仏教は、南タイの人々には、なかなか受け入れられるものとはなっていかない。これはまさに、宗教が役割を果たせるかどうかというのは、社会的、歴史的なコンテキストによるということを示しているのです。同時に、南タイの事例を加えたのは、東北タイの事例、上座仏教のコンテキストをきわだたせるためという意味もあります。

今後の展望

――今後の展望はどう考えておられるのでしょうか。

櫻井：「上座仏教」という枠組みでは、本書で一区切りがついたと考えています。この枠組みで研究を展開しようとすると、もっと専門的に仏教そのもののなかに踏み込んでいかなければならないし、僧侶の宗教体験というものにも踏み込んでいかなくてはなりませんが、それは、私の関心からは外れてしまいます。

しかし、「宗教と社会貢献」という枠組みからは、上座仏教とは違う宗教伝統、また、東北タイとは違う地域を調査することによって、比較文化論的な考察をやっていきたいと思っています。

地域としては、東アジアが気になっていて、韓国や中国、台湾などを対象として考えています。東南アジアは、その社会のあり方からして、しっかりした枠組みを立ててアプローチをするとかえって理解が難しくなるというところがありますが、東アジアの研究は、枠組みもはっきりしているし、先行研究の蓄積も多いですから、東南アジアを対象とした場合と同じやり方では難しいところがあります。しかし、例えば、韓国からキリスト教の福音派が大量に入ってきて、日本で活発な活動をしているというような、現代日本の宗教

現象を考えた場合、東アジアとの関係史は考えなくてはならないことだし、韓国のなかでのプロテスタントの位置づけということも考察しなければならない。このようなかたちで、比較宗教文化のようなことをやっていきたいと思っています。

――本日はどうもありがとうございました。

（文責：井手直人）